

2012年11月25日 「神の使命に生きる喜び④<まじわり、成長>」

今日は午後から会員総会、来年度の方針を定める大事な会議。大きな目玉は、私たちの教会に与えられている5つの使命に対応した、5つの委員会に組織改編すること。これによって、これまでよりも一層明確に、私たちの教会の進むべき道を認識して、それを教会全員で共有していきたい。奉仕活動にはなかなか参加できないお年寄りや子どもたちにも、私たちの教会はこういう教会だとはっきり意識していただいて、その活動のために祈っていただきたい。また、まだ洗礼を受けておられない求道の友や、会員として加入されていない客員の皆さんにも、ぜひ覚えていただきたい。私たちの教会がどういう目的に向かって努力している群れなのか。そして、この群れに加わって共にキリストに従いたいという思いが、皆さんの中に起こされればいいなあと私は願い求めています。

そのような狙いをもって、四回の主の日にわたって、5つの使命についてのテーマ説教をしてきました。今日で最終回、交わりと成長ということを学ぶ。まず「交わり」ということを考えていきましょう。私たちの教会は、「交わりに生きる」ために存在しています。すなわち、神の家族としての真実の交わりをここに作りだし、この交わりへと、出会うお一人お一人をお招きすることが、私たちの教会の使命です。なぜそのように言うことができるか、それは今日お読みした大伝道命令に起きまして、「すべての民に洗礼を授けなさい」と命ぜられているからです。洗礼は、水によって洗うという儀式ですので、まさに水でもって体の汚れが洗われるようにして、私たちの罪がキリストの血と霊によって洗われること（ハイデル 69～73）を表し、保証し、しるしづけるものであります。それと同時に洗礼とは、教会という契約共同体への加入式でもあります。

ウ小教理 94、大教理 165 によれば、洗礼によってキリストは、その洗礼を受けた者をご自身に接ぎ木してくださると教えます。接ぎ木というのは、バラの栽培をしているとよく分かるのですが、元々病気に弱い品種を、強い品種に接ぎ木することで、その強さ・生命力によって成長させること。洗礼を受けることで罪深い私たちは、キリストという聖なる頼もしい方に接ぎ木されて、私たちもまた聖なるもの、頼もしい者として、これまでとは質の違う人生を歩み始める。それがキリストに接ぎ木されるということです。私はぶどうの木、あなたがたはその枝であるとイエス様は言ってくださいましたが、そういう意味では、イエスという立派なぶどうの木に、私たちが接ぎ木されて、その一部とされていくと考えるとイメージしやすいと思います。

しかし忘れてはならないのは、そうやってキリストというぶどうの木に接ぎ木されているのは、自分一人ではないということです。たくさんの兄弟姉妹がすでに先に接ぎ木されて、イエス様から永遠の命をいただいています。ぶどうの木の一枝として豊かな実りを実らせています。私たちは洗礼を受けることによって、そういうぶどうの木の一枝に加えられるのです。そして先に接ぎ木された兄弟姉妹が味わっているのと同じ祝福を（罪の赦し・永遠の命・再生・子と

されること、神の愛の確信、聖化、愛の増加、魂の平安 etc) 共有する者になるのです。こういう具合に、洗礼というのは教会共同体への加入式という意味合いを強く持っています。ですから、洗礼を受けなさいというのは、「教会という共同体に人々を招きなさい」という命令と同じです。心冷え切ってしまった孤独な魂を、神の家族の一員として、交わりのあたたかさの中に迎え入れることが主の望みです。

極めて大切なこととして覚えていただきたいのは、聖書的な信仰とは決して個人的なものではなく、共同体の一員として歩むということが求められているということです。信仰の歩みというのは、兄弟姉妹と助け合い、祈りあいながら、共に戦い共に成長していく道なのです。聖書によれば、「人が独りでいるのは良くない(創世記 2:18)」とされています。最初アダムは単独で創造されましたが、独りではよくないと、助け手・かけがえのないパートナーとしてのエヴァが作られた。これは結婚式の時に解き明かされることも多い個所ですが、結婚の恵みということだけが言われているのではない。そうではなく、人間と言うのは根本的に共同体的な存在であることを教えてくれています。独りでいるのは人間の本来あるべき姿とは違うのです。神は人間を、孤独に生きるものとして創造されたのではなかったのです。神がそういう孤独な方ではないからです。神が愛なる方であり、交わりに生きる方。それと同じように、神のかたちとして作られた人間も、他者との深い人格的交わりの中で、誰かと共に生きるように、そして家族や共同体を形成していくようにと創造されたのです。自分と向き合う兄弟姉妹の存在を、欠かすことのできない大事な助けとしていただいて、共に尊重しあって生きていく。それが人間本来のあり方だと示されているのです。

今、私たちの社会は、個人主義がはびこっているとされます。私も熊本の時、自治会に参加していましたが、災害時に身寄りのないお年寄りをフォローできるようにということで、自治体で体制作りに取り組んでいた。しかし、残念ながら情報が足りないために、どこにどんな人がいらっしゃるのか正確に把握できない。それは、そういう自治会のかかわりを拒んで、情報提供されないお年寄りが多いからです。お年寄りさえそうであるなら、若者は言うまでもない。「文明は、人が一人で生きていくことを可能にする」と言った人がいるそうです。オンラインショッピングを利用すれば、誰にも会わずに欲しいものが手に入る時代です。誰とも会話することもなく、一人で延々とパソコンに向かっていく人々の姿を想像します。でもそんなことが確かに「可能」にはなりましたが、それで人間が幸せになったわけではありません。誰も助けてくれない、そして誰をも助けようとしないう、そういう自分の孤独な現実には耐えられずに、多くの人々が心を病んでいきます。それは人間本来のあり方とは違うのです。そんな中で、人間の本来あるべき姿を回復するのが、私たちの教会に与えられている使命です。ここに、真に命の通った交わりを作り出すのです。人間が共に生きることの美しさを表すのです。

とはいえ、私たちは罪人ですから、共に生きることに難しさを覚えます。他者と共に生きるということは、時として本当に苦しいことです。私たちが日常生活で味わうストレスや心の痛みのおよそ半分は、人間関係に基づくものといえると思います。人間は罪人であると聖書は示してい

ますが、そんな人間の罪の現実が一番明らかになるのは、人間の集まる場所です。たとえば、東仙台教会ではボランティアセンターというかたちで、教会に若者たちが寝泊りして、近隣の片付けや避難所への配達などを手伝っていましたが、そのボランティアの仲間たちの中でも、いさかいが生じると聞きました。みんなまじめで心優しい若者たちです。だれかの助けになりたい、だれかと向き合う働きがしたいと望んで集まった。でも決して一体とはなれずに苦しんでいる。それぞれの目指す方向性の違い、性格の違い、そういう小さなズレが、疲れが増すごとに大きくなっていく。そういう中で、不信感、怒りや、ねたみを覚えたり、相手を軽蔑したり、侮辱したり、様々な罪深い思いに支配されていってしまう。

教会も同じでしょう。みんな、同じものを見つめているはずなのに、見る角度がそれぞれ少しずつ違うから、つまずきがあり、一つになれないということがあります。誰かのちょっとした言葉に傷ついたり、傷つけてしまったり。そういう中で、教会の交わりに嫌気がさして、孤独な信仰生活を選ぶという方もいらっしゃる。教会員同士でも互いに壁を作って、一線を引いてお付き合いしていくのが大人の知恵ということもいえるでしょう。

でも聖書によれば、本質的にキリストの救いというものは、そういう隔ての壁を粉々に砕くものなのです。エフェソ2：15にこうあります「こうしてキリストは、双方をご自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して両者をひとつの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」互いに敵対する二人の人をご自分において一人の新しい人に造り上げて、平和を実現される、これがイエスの十字架の救いだと示されています。十字架を通して両者を一つの体とすると言われます。どういうことかといいますと、十字架という究極の愛と赦しをもって、その愛の強烈なハンマーパンチをもって、互いにいがみ合っているような私たちのせせこましさを徹底的に砕かれるのです。愛し合えない者たちよ、そのお前たちのために私は死んだのだ。この十字架の愛の前で黙れ！！（私があなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい）と、私たちがそれぞれに砕いてくださって、そしてイエス様は、そのバラバラの破片を、ご自分の血をもってくっつけてくださって、まったく新しい「一人の人」を造り上げてくださいます。

イエス様の救いというのは、そのようにして人と人との和解を広げ、真実の交わりを広げていくものであって、決して人を孤独に導くものではありません。このイエス・キリストを信じる人々のあいだに、神は人間本来のあり方を回復していただきます。隣人と真剣に向き合い、共に生きる。そんな健やかな人間性を、イエス様のもとで回復していただきたいと思います。教会はそのようにしてイエスの十字架の愛によって生み出された「一人の人」、真実の交わりのあるべき場所。そして教会は、すべての人々に真実の交わりを提供するために存在しています。これが私たちの「交わり」という使命です。

そして今日はもう一つ、「成長」ということも考えたいが、これも実は「交わり」ということと切り離せない。霊的成長は一人で追求していくものではありません。そんなことは不可能で

すし、そのような成長は決して健全なものではありません。共同体の中で、共同体と共に、教育・訓練を受けて人格を成熟させてゆくことが大切です。

改めて、「成長」という使命を確認します。私たちの教会は、集められた神の民を教育・訓練することで成長させるという使命を与えられています。またそのようにして、私たちの教会全体が霊的に成長していくということを、神は望んでおられます。それは、今日の大伝道命令にある「あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」という命令から導き出すことのできる使命です。教会はクリスチャンを生み出し獲得するだけでなく、その養育にも責任を負わねばなりません。誰かがキリストを信じる決心をしたら、その人を適切に教育・訓練して、その生涯を通して、思考・感情・行動など全人格において、「キリストと似た者とされていく（＝聖化）」ための手助けをするのです。

そのために第一に必要なのは、聖書の学びでしょう。「あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい」、「命じておいたこと」すなわち、主イエスが使徒たちを通して私たちに残してくださった、永遠の命に至る道の教えのすべて。それは今や、聖書という書物に記録され保存されています。ですから私たちは、まず何よりも聖書を教え、学ぶ必要があります。「聖書はすべて神の霊の導きのもとに書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をする上で有益です。（Ⅱテモテ 3：16）」聖書こそ、私たちの訓練のための教科書。

「聖書」をよく知る信者が多くいる教会は力強いです。聖書の知識を多く持つことで、自分は何を信じているのか、キリストの救いとは何なのか、神とはどういう方なのかを、しっかりととらえることができるようになります。そうやってあいまいな信仰から成長して、確信が深まれば深まるほど、伝道にも自信がついてきます。神様ってすばらしいのよと伝えるだけでは伝道できません。どうすばらしいの？こういう時はどう考えるの？などと問われてしどろもどろになってしまっただけでは、残念ながら説得力がありません。「聖書はこのように教えてくれています。私はこの言葉をよりどころにして生きているのです」、と、相手にはっきり伝えることができれば、相手も喜びますし、自分自身が一番うれしくなるはずです。そういうクリスチャンとしてのベースアップのために、聖書の学びが必要です。講解説教、祈祷会、聖書研究会、またリジョイスなどの聖書日課、日々の御言葉メールなどが、聖書教育の手段です。

また、教会が歴史の中でまとめあげてきた教理の教育も必要です。「すべて教えなさい」と言われています。聖書の様々な真理を、ばらばらにではなく体系として、またどれか一つの教えに偏らずにバランスよく万遍なく教えるということです。例えば、私たちは死んだあとどうなるのか、そういったことがまだよく分からないけど、なかなか学ぶ機会がない、聖書を開いても、どこに書いてあるのかが分からない。そういう時こそ、教理問答を開くのです。そうしたら答えが示されていて、聖書のこことあそこにこういうことが書かれていますよと示されています。特にウエストミンスター信仰基準は、正統的教会が生み出してきた歴史的諸信条の中でも「聖書に於いて教えられたる教理の体系として最も完備せるもの（創立宣言より）」であるために、私たちの教会では大切に学びます。

聖書を学び、教理を学ぶ。でもそれだけでは足りません。実践を通しての訓練が必要です。「行いが伴わないなら、信仰はそれだけでは死んだものです。(ヤコブ 2:17)」聖書の教えは、信じ告白されるだけでなく、実践されねばなりません。祈りについて学ぶだけでなく、実際に祈ることが必要です。希望について学ぶだけでなく、実際に希望をもって生きることが大事なのです。賛美し、伝道し、様々な奉仕に励む、愛の業に努める、そういう実践を通して私たちは成長していきます。そこで大切になってくるのが、共同体に連なる兄弟姉妹との交わりです。信仰の成長には「まねぶ」ということが極めて大切になってきます。私もこれまでに、信仰の先輩たちの背中からたくさんのごことを真似させていただきながら成長させていただきました。長老たちと一緒にトラクトを配ったり、教会の掃除をしたり、牧師に祈っていただいたり、そういうまじめな話ばかりじゃなくて、笑ってしまうようなこともいっぱいあります。求道中や洗礼を受けて間もない頃は、よく長老さんのお宅でご飯をいただいたりしましたが、そうやって楽しくみんなで食事を喜んでいる姿にクリスチャンって素敵だなと思いました。酔っ払うと、必ず歌を歌いだす長老がいらっしゃいました。もちろん讚美歌です。「わし歌わせてもらうわ」と、独唱が始まる。それに合わせてみんなも歌いだす。私はそういう愉快的エピソードを通して、信仰をもって生きることの喜びを、体で教えていただきました。信仰の成長には、そういう兄弟姉妹との思い出のつまったエピソードがいくつも必要なのです。

なにより私たちは、この兄弟姉妹との関わりを通して、愛において成長していきます。信仰の成熟は、愛の成熟と切り離すことはできません。愛が成熟してこそ、私たちは信仰者として本当に成熟してきた、キリストに似てきたとすることができます。ペトロの手紙Ⅱ 1:5 からにこうあります「だからあなたがたは力を尽くして信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には信心を、信心には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加えなさい。これらのものが備わり、ますます豊かになるならば、あなたがたは怠惰で実を結ばない者とならず、わたしたちの主イエス・キリストを知るようになるでしょう。」このようにして、信仰の成長のために必須の事柄が列挙され、その頂点として、兄弟愛と愛があげられている。愛において豊かにされていく時に、私たちは本当の意味でキリストを知ることになる。

「イエスは、わたしたちのために、命を捨ててくださいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。だから、わたしたちも兄弟のために命を捨てるべきです。(ヨハネ I 3:16)」

主は私たち一人一人に、自分を犠牲にする献身、兄弟姉妹を思いやる愛を求めておられます。教会の交わりは、そのような愛の実践の学校です。単に礼拝に出席し、受身的な傍観者でいるだけでは、私たちは霊的に成長することができません。一人で愛を学び、聖なる生活を志向しても、それは試されたことのない聖さであって、本物ではありません。本当の成熟は、傷つきながら躓きながらも、深く関わりあう教会の交わりの中に現れてきます。主はそのような成熟へと私たちを招いておられます。